

Garage33+ソー・ソウエン キュレーション映像作品上映

上映作品

【マリア・クリコフスカ／Maria Kulikovska】

- 1,《The Army of Clones》制作ドキュメント映像、2010 年、9' 48"
- 2,《Homo Bulla in IZOLYATSIA》制作ドキュメント映像、2012 年 4' 00"
- 3,《254. Action in Hermitage》パフォーマンス記録映像、2014 年、
エルミタージュ美術館、サンクトペテルブルク 7' 10"
- 4,《Happy Birthday》パフォーマンス記録映像、2015 年、
サーチ・ギャラリー、ロンドン、1' 17"
- 5,《Forgotten: Fusillade 6 Soap Figures》2019 年、0' 30"
- 6,《Lustration / Ablution №2》2018 年、2' 17"
- 7,《My Skin is My Business》2019 年、1' 52"
- 8,《Raft CrimeA》パフォーマンス記録映像、2016 年、3' 16"

【ソー・ソウエン／Soh Souen】

- 1,《Pain things》2025 年、5' 03"
- 2,《Eggsercise》2023 年、2' 30"
- 3,《Eggsercise》2022 年、13' 50"
- 4,《Eggsercise your body is the shoreline》2022 年、7' 20"
- 5,《Belly button and Breathing performance》パフォーマンスアーカイブ映像、2022 年、福岡アジア美術館、4' 05"
- 6,《The Egg》パフォーマンスアーカイブ映像、2023 年、福岡市美術館、4' 52"

すべてご覧になると1時間17分

11時～18時のあいだ、上記の映像をループ上映いたします。

上映作品紹介 マリア・クリコフスカ／Maria Kulikovska

マリア・クリコフスカは、自分自身の身体を型取りした彫刻シリーズを様々なバリエーションで発表している。

1,《The Army of Clones》は、その彫刻シリーズの初期の1つで、「身体」とその「境界」を探求し始めるきっかけともなった作品である。

身体の鋳型制作は、クリコフスカにとって、自己表現と抗議を表現するものだ。男性が女性を支配するような家父長制社会における女性、とくに女性アーティストの社会的立場への偏見に対する抗議として、一連の彫刻シリーズを制作する。また、クリコフスカは、このテーマの議論・討論を行う場も創出している。

2,《Homo Bulla in IZOLYATSIA》は、2012年春、ドネツク州にある「イゾリャツィア・アートセンター」で行われた展覧会「ジェンダー」に参加したマリア・クリコフスカの出品作品《Homo Bulla - Human as Soap Bubble》の制作ドキュメント映像。

身体をかたどる彫刻の素材に石鹸を用いるのは、16世紀の絵画等で「シャボン玉」を人間の生命の儚さ（ヴァニタス）を象徴するモチーフとして描いていたことの現代的解釈である。

展覧会期後もイゾリャツィア・アートセンターに設置されていた《The Army of Clones》と《Homo Bulla - Human

as Soap Bubble》は、2014 年にドンバス地方が親ロシア派によって占領された際、同アートセンターも占拠され、ドネツク人民共和国（DPR）の武装勢力によって銃撃されてしまうことになる。クリコフスカは作品やパフォーマンスの中で、この出来事へ応答・考察を深めていく。

3, 「254」とは、2014 年に生まれ故郷のクリミアを占領され登録難民となったマリア・クリコフスカに割り当てられた番号である。

この映像は、2014 年 7 月 1 日、ロシア・サンクトペテルブルクのエルミタージュ美術館で開催された現代アートビエンナーレ「マニフェスタ'10」のオープニング中に、無許可のパフォーマンスを行った時のもの。ウクライナ国旗に包まれ、負傷した兵士のような姿勢で美術館の階段に横たわるパフォーマンスによってクリコフスカは一時的に拘束され、ロシアの「入国禁止アーティスト」リストに追加されることとなった。

4, 2015 年、ロンドンのサーチ・ギャラリーにて行った、自身の身体を模った石鹸彫刻《Homo Bulla - Human as Soap Bubble. Replica》をハンマーで粉砕するパフォーマンス『Happy Birthday』記録映像。

緑の石鹸彫刻を破壊するようなこのパフォーマンスは、イゾリャツィア・アートセンターで起きた出来事に対する、クリコフスカの痛烈な批判としての回答である。

会場で、マリリン・モンローの「ハッピーバースデー」を流し、自身のフェミニズムに関する活動の一つ "Flowers of Democracy" のシルクスクリーン T シャツを彫刻の頭に被せて、クリコフスカが展示ホールを後にするところまでが映されている。

5, クリコフスカは、2019 年、ダリア・オニシェンコ監督による映画『Forgotten（忘れられた人）』に、ルハンスク人民共和国（LPR）の親ロシア派ジャーナリストという役柄で出演した。映像のなかでクリコフスカの体験をもとに、イゾリャツィア・アートセンターに展示されていた石鹸彫刻が銃撃された出来事に基づくパフォーマンスも撮影された。

映像の中で銃撃される 6 点の石鹸彫刻のうち 3 点は「バリスティック・ソープ（弾道用石鹸）」を素材に、体液や植物の汁などを混ぜて 2018 年に制作したもの。

＊弾道用石鹸：人体や筋肉組織への銃弾の貫通力・殺傷力を測定・検証するため、皮膚や筋肉の硬さを模して作られた特殊な試験用の石鹸ブロック

6, 身体を正確に模った石鹸の像を洗い清めるパフォーマンスシリーズ。Lustration とは、犠牲を伴う浄化を示す。自らの手で、「自分自身」から石鹸の皮膚を洗い、削り、引き剥がし、自らを拭き、洗い、自分の「身体」を揺さぶりながら、家父長制の文脈における自身のイメージや女性のイメージを浄化する。

自分の手を洗い、消し去るという行為は、女性の「見えない労働」を表す。社会にとって美しく、自然なものとして、すべての女性の肌そのものに織り込まれているが、一方で、無意識のうちに溶かし去ることもできる。

7, 《My Skin is My Business(私の肌は私のもの)》は、オデッサ美術館の地下にある洞窟ギャラリーで開催された展覧会のタイトル。2014 年、イゾリャツィア・アートセンターで起こった、ドネツク人民共和国（DPR）の武装勢力による彫刻作品の銃撃という忌まわしい出来事は、その後、クリコフスカをより政治的パフォーマンスに向かわせ、また自らを模った彫刻を自ら銃撃するというアクションを生み出している。オデッサ美術館では、これらのアクションを行うために制作された彫刻作品を用いた洞窟でのインスタレーションを制作した。クリコフスカの故郷クリミア半島のケルチには古代ギリシャの遺跡が点在し、彼女も子どもの頃から親しんでいた。古代ギリシャ建築の特徴の一つに、女性立像が建築の柱の意匠になっているカリアティード（Caryatid）がある。建物の重量を一身に担う女性の姿の背景に家父長制を見出したクリコフスカは反発の気持ちを抱き、自身の作品で意味の転覆を試みる。

8, 2016 年からクリコフスカが継続している社会彫刻としての活動《Raft CremiA（クリミアの筏）》。2016 年 8 月 16 日～19 日、キーウ・ドニプロ川に、ネオンサイン付きの救命いかだが現れた。クリコフスカは、彼女を気遣う人々の支援だけを頼りに、いかだの上で生活した。

計画では、EU の（見えない）水上の国境を越えてヨーロッパ圏の川旅を続けようと、8 月 19 日キーウのドニプロ川を出発。しかし、8 月 25 日、ウクライナのヴィルコヴェで、「クリミアの筏」はウクライナ国境警備隊によって阻止され、パフォーマンスは予定より早く終了した。

その後も、2016～2018 年の間にパフォーマンス、展覧会、レクチャーパフォーマンスといった様々な取組みを繰り返し、本映像は、10 回目のパフォーマンスの様子である。《クリミアの筏》プロジェクトでは映像はほぼ残っておらず、貴重なドキュメント映像である。クリコフスカが詩の朗読をする本映像は、プロジェクトの広がりからするとごく一部のドキュメントだが、本プロジェクトを紹介したく、上映する。

《Raft CrimeA》についてクリコフスカは語る。「『クリミア』という名の筏は、芸術作品であり、また現実的な政治的提案でもある。水路はいつも国家の発展に必要なものだ。また、家を失い、安全や生き延びる可能性を求めて、今日、何千人もの人々がボートや筏に乗って、彼らを待っているわけではない岸へと向かっている。地図上に記されていないこの新しい共和国は、膨大な人口を抱えて波間を漂っている——それは移民たちの幻の共和国だ。誰もがその市民になる可能性がある。「クリミア」という救命筏は、居場所も政治的 대표権も奪われたすべての人々のための、大使館であり、流浪の議会となるだろう」

上映作品紹介 ソー・ソウエン／Soh Souen

1, 「VOCA 展 2026」で奨励賞受賞した組作品から映像の上映のみで紹介する。

「呼吸」の存在が母から生まれて「個」となり、大気のなかへと混ざり合っている私たち。5《Bellybutton and Breathing》から続く「お臍」と「呼吸」をめぐる視点が拡張され、産声と、同時に始まる呼吸は、母との分離への抵抗であり、吸って吐く息が世界を微かに震わせることが人と人との分断への抵抗となる、という、本展「Air Condition」へとつながっていく契機となった。

2~4, 「生命の象徴である生卵を身体にくぼみに挟み、落とさないように動くこと」をルールに、自分の身体と他者の身体、または、壁や家具など空間にあるものとの間に生卵を挟み、何時間も落とさぬようにゆっくりと動きつづけるパフォーマンスシリーズ。

傷つきやすい身体で生きていく理由が知りたい

できることなら、わたしたちの身体を、何かを傷つけるためではなくて、

大切なものを壊さないために動かす方法が知りたい

このパフォーマンスが最初に発表されたのは 2022 年。その構想にはロシアがウクライナに全面侵攻したことも影響している。戦時下におかれた身体の弱さ、脆さに向けられたソウエンのまなざしは、戦争を批判することに留まらず、反戦への熱気が同調圧力となって、「守ることが傷つけることになる」反転の可能性にも注意深く向けられている。2022 年以降、現在も、ヴァリエーションを生みながら各地で継続して発表されており、《Eggsercise》が内包する問いは、今なお続いている。

5, 2022 年 12 月 10 日に、福岡アジア美術館あじびホールにて行ったパフォーマンス映像。

「個」として生きるとは、自分自身の境界とはなにかと考察する中で生まれた作品。臍は、母から生まれたあと体に残る「傷」。この傷によって、自分が世界へと溶け出していくことを留め、「個」を保たせる機能を担っているのではないかと考えたソウエン。母から離れて臍を持ち、「個」となった私たちは、呼吸を行い大気に混ざりあっていく。大気＝世界と混ざり合いながら、「個」として生きるというアンビバレントな状況を乗り越えることとは。コロナ禍において、15 名のパフォーマーを公募して、協働で制作を行った実践的作品。

6, 福岡市美術館エスプラナード（FaN Week 2023）にて行われた「卵」を介して自己と他者の関係性を探っていくパフォーマンス。

パフォーマー：ソー・ソウエン、サラ・ミリオ

プロフィール

マリア・クリコフスカ／ Maria Kulikovska

1988 年、ウクライナのクリミア半島ケルチ生まれ、ウクライナ国立美術・建築アカデミー（キーウ）にて建築・構造学を学び、コンストファック大学（スウェーデン・ストックホルム）で美術修士号取得。2014 年、ロシアのクリミア併合後は故郷に戻ることなく、キーウや EU 諸国を移動しながら生活・活動している。2018 年からキーウ拠点、2019 年にパートナーで共同制作者であるオレグ・ヴィニチェンコと、キーウに Garage33 Gallery-Shelter を立ち上げる。2022 年 2 月 24 日にロシアの全面侵攻の約 1 ヶ月後から、生後まもない赤ちゃんと共にオーストリアへ避難を余儀なくされる。現在は、イギリスの大学院博士課程に在籍して研究を行うと同時に、精力的に作品を発表している。

ソー・ソウエン／ Soh Souen

1995 年、福岡県北九州市生まれ。2019 年、京都精華大学芸術学部造形学科洋画コース卒業。「呼吸」、「お臍」、「卵」など私たちの生と密接な事象から、人間の性質に迫る作品を多く手がける。絵画作品を主軸としながら、ワークショップやインスタレーション、パフォーマンスなどを国内外にて発表。コロナ禍に始まったサラ・ミリオとの共同プロジェクトや、銀座エルメスフォーラムにて内藤アガーテの作品を使用したパフォーマンスを実施するなど、さまざまな協働制作も行い、独自の活動を展開している。主な展覧会に個展「Your Body is the Shoreline」√K Contemporary（東京）、「日常のコレオ」東京都現代美術館、「FATHOM - 塩田千春、金沢寿美、ソー・ソウエン」京都精華大学ギャラリー Terra-S など多数。「VOCA 展 2026」奨励賞受賞、2024 年、インスタレーション作品「Bellybutton and Breathing - お臍と呼吸」が福岡市美術館に収蔵された。

マリア・クリコフスカさんからのメッセージ

熊本の大地が揺れたという知らせを受け、この手紙を書いています。
まず最初に芸術のことではなく、どうか熊本の皆さんが、ご無事であることを心から願っています。

これまで安心して身を委ねていた「家」が、突然、信頼できないものへと変わってしまう——その感覚を、私はよく知っています。私たちの場合、その原因は異なりますが。それゆえ、この言葉には二重の思いを込めています。

今回、私の作品をソー・ソウエンさんの展覧会の中に迎え入れてくださったことに、心から感謝します。私にとって、それは単に作品を上映するという以上の意味を持っています。それは、一人のアーティストであり友人でもある人からの、本当に人間的な行為です。誰かが自らの壁を少し脇へ移し、その壁の上に、別の誰かの宇宙が姿を現すことを可能にする——そのような行為なのです。

ここからは、「芸術とは何だと思いますか」という、あなたがたからの質問、にお答えしたいと思います。少し前まで、芸術とは、私自身の感情を語るための手段でした。言葉では到底言い表せないこと——あまりにも強すぎて、それを表す言葉など存在しないもの——を伝えるための方法でした。

それは、自分の正気を失わないための術であり、受け入れてくれない世界、むしろ人を破壊してしまう世界と、どうすれば対話できるのかを探る方法でもありました。周囲のあらゆるものが、あなたを単なる「数字」へと変えてしまおうとするとき——報告書の中の数字、名簿の中の数字、誰かがあなたの土地や精神、才能、人生のために勝手に描いた計画の中の数字へと変えてしまおうとするとき。そして、「傷を見せて、黙って、被害者としてそこに居続けなさい」と求められるとき。芸術は、それに抗うための私自身の言葉だったのです。

けれど今、私の芸術はさらに深く、より詩的になり、直接的な表現からはいっそう距離を置くようになりました。それでもなお、完全な誠実さをもって語っています。

私にとって芸術とは、癒やしの方法です。
トラウマと、繰り返し傷つけられ続ける経験のあとに、もう一度生を見出すこと。自らの傷跡を受け入れ、その中に美を見つけ、それをさらに育んでいくこと。その美しさは、奇妙で、序列とは無縁であり、ときには醜さと美しさが同時に存在するようなものかもしれません。

それは、人が本当に生きることのできる世界を築くという切実な必要性でもあります。そこでは、誰も「都合のよい存在」であることを求められず、誰も同意なく触れられることはありません。ケアはサービスではなく営みであり、美しさもまた、「価値あるもの」と「価値のないもの」とに選別されることはありません。

はっきりと言います。そうでなければ正確ではないからです。
かつて、私の芸術は「喪」のかたちでした。
現実のなかで喪に服するという贅沢は、私には与えられていませんでした。喪には、時間が必要です。安全な場所が必要です。そして、その悲しみを受け止めてもらえる場が必要です。当時の私には、そのどれもありませんでした。

喪（も）することを許されなかった悲しみは、終わることがありません。だから、それは作品の中へと移っていったのです。

私が喪（うしな）っていたのは、地政学的な領土ではありませんでした。
「故郷」と感じられる場所を失ったこと。
生き延びることではなく、穏やかでよい人生を送る権利を失ったこと。
私の人々を失ったこと。

そして、裏切りと崩壊によって終わった初恋を失ったこと。その恋は、思い出さえ残さず、ただ亡霊だけを残しました。そして、もしかすると、その愛は最初から存在していなかったのではないか——そんな思いだけを残して。

心理学者ポーリン・ボスは、このような喪失を「あいまいな喪失 (ambiguous loss)」と呼んでいます。確認されることもなく、終わりを迎えることもない喪失です。

私的なものと地政学的なものは、同じ瞬間に崩れ落ちました。地政学、占領、そして戦争という、同じ試練に耐えきれなかったのです。そして今もなお、私は、その二つの廃墟を本当に切り離して語ることができるのか、確信が持てません。

長いあいだ私は、このような喪失は、悲しむに値するものとさえ見なされないのだと思っていました。

けれど今——身体的にも精神的にも深い危機を経験した今、私は知っています。
喪は、故郷にはなりえない。

しかし、それはひとつの段階なのです。そして私の方法論において、それは最初の段階です。作品が終わる場所ではなく、作品が始まる場所なのです。

私は今、その先へ進もうとしています。
芸術と科学、そして共同の癒やしが交わる、新しい実践へと。
その実践とは、鑄造（キャスト）です。

私は、時間のなかでは残ることのできないもの——花、皮膚、肉、空間を構成するさまざまな要素——のかたちを写し取り、それらを、やはり壊れやすい素材へと鑄込みます。樹脂、真珠母、そして癒やしの薬草を混ぜ込んだ透明な素材などです。

この冬、マルタ・ビエンナーレでは、七千個を超える薬莢を樹脂で鑄造しました。その一つひとつに、一輪の花を宿しています。

最も新しい作品では、子どもの揺りかごを鑄造しました。
さらに私は、それらに新しいテクノロジーや空間デザイン、パフォーマンスを組み合わせています。

私が関心を寄せているのは、記念碑ではありません。
一時的でありながら、生き続けるかたちです。
自由で、繊細であり、そして同時に、私以外の誰かのためにも役立つことのできる存在です。

戦争は、私が生きている状況であって、私が扱うジャンルではありません。

もうひとつ、これまで口にする勇気のなかったことがあります。
私は今、自分自身のもとへ戻りつつあります。かつてからずっと私であった、その自分自身へ。ただ、以前よりももっと深く。

そして私は、自分が祖母の「コピー」ではなく、その意志を受け継ぐ者なのだと感じています。

祖母は、生涯を通してファッションデザイナーになることを夢見ていました。しかし戦争によって、その夢を諦め、農学者となり、そして人を癒やす者となりました。
今、私は祖母が語ってくれたこと、与えてくれたもの、受け継がせてくれたもの、そして祖母が信じていたすべてを思い出しています。

長い間、私はそれらを脇へ置いてきました。世界に受け入れられるために。
けれど今、それらを自分のもとへ取り戻しています。
私にとって「故郷へ帰る」とは、かつてあった場所へ戻ることはありません。

ありのままの自分自身へ帰ることなのです。
だから今、私は知っています。
私にとって唯一の故郷は、私の芸術なのだ。

人と人との関係の未来を、私はどのように思い描いているのでしょうか。
それが今より良いものになるかどうかは、私にはわかりません。
けれど、その始まりがどこにあるのかは知っています。

それは、「心を向けること」です。
遠くから寄せる同情ではなく、心を向けること。
名前を覚え、一人ひとりの顔を見分け、疲れることなく周囲を見渡し、近くにいる人が大丈夫だろうか
と気にかける、そのようなまなざしです。

そして、自分のものではないごみであっても、ためらわずに腰をかがめて拾えるようになること。その
場所に、人を癒やす植物が芽吹くことができるように。

この場に集まる皆さんへ――

私たちは、地球の反対側に暮らしています。それでも、私たちの国ではどちらも、大地が突然、足元の
確かさを失うことがあります。

皆さんは、「再び築き直す」ということが何を意味するのかを知っています。
私もまた、再建することを夢見ています。

けれど、生き延びることだけに留まりながら、その夢を見続けていたいとは思いません。
これほど遠く離れた場所から互いを見つめ合うこと、それ自体が、無関心に抗うひとつの行為なのです。

私たちに何ができるでしょうか。

どうか、見続けてください。
そして、その出来事が「いつものニュース」になってしまったからといって、目を背けないでください。

実際に、戦争はやがて日常のニュースになってしまうのです。
物事を、その本当の名前で呼んでください。

戦争。
占領。
強制移送。

そして、ウクライナのアーティストを招いてください。
戦争があるからではなく、戦争を語る存在としてでもなく、同じ表現者、同じ仲間として。
教えるために。
ともに制作するために。
この場所へ来てもらうために。
そして、一緒に未来を築くために。

どうか、この度の地震のあと、ご自身のことも大切になさってください。
私たちは、これからも互いを必要としているのですから。

温かな感謝を込めて

マリア